

環境教育研修会A(自然体験教育)が行なわれました

環境教育研修会A(自然体験教育)が以下のように実施されました。この環境教育研修会を受講した教員には認定証が発行されました。

1 テーマ

「保育者自身の感性を開きなおしてみよう」

2 開催の主旨

幼児教育における環境教育は、幼児にふさわしい生活や遊びのなかで、五感を使った自然体験を充実させ、人と自然の関係を感性の領域でとして育むことが大切です。そこでこの「環境教育研修会 A(自然体験教育)」においては、保育者の自然体験による研修と、公開保育による研修会を行い、保育現場で実践できる環境教育を学びました。

3 内 容

日 程	会 場	内 容
第1回 5月26日(土) 9時30分～12時	モリコロパーク もりの学舎(愛・ 地球博記念公園)	野外に出てフィールドワークを楽しみます。 ファシリテーター 環境教育特別委員会委員 インタープリター もりの学舎

研修記録

「自然を体験することの素晴らしさ、大切さ」を五感を使って感じたり、普段当たり前のようにある自然に目を向けて、参加者自身が自然に対する視野と感覚を研ぎ澄ませていくところにねらいを定めました。

モリコロパーク内の自然を散策して、グループごとにテーマ(老年期、中年期、青年期、少年期、幼児期)を選び、宝箱の中に自然物を採取し、それらを利用してテーマに沿った発表を行うという活動を行いました。

それぞれのグループが採取してきた自然物を利用して創作活動を行い、加えて発表もしました。「もりのなんでもお宝鑑定団」と題しそれぞれのグループ発表に対して「もりの鑑定士」(環境委員)が得点を付けて楽しむ活動を行いました。

グループごとにそれぞれの視点でテーマを捉えることができました。若々しい草花を採取して箱の中にテープで貼り付けたり、草で結びつけ製作を楽しんだりするグループがありました(青年期)。他にもシロツメクサを編んでブーケを作り、それを使って結婚式の寸劇を発表したグループや(幼年期)、テーマに合った草花を採取してそれらを上手く張り合わせて中年の人の顔のイメージを表現するグループ(中年期)などがあり、自然に対する視点や感性を参加者全員で共有することができました。

第2回	11月3日(土) 9:30~12:00	あさひこ幼稚園 (岡崎市)	「公開保育とそれに基づく研究協議会 ①」 ファシリテーター 環境教育特別委員 会委員
-----	------------------------	------------------	---

1 協議会での質疑応答

Q. 自然環境の中での年中児の保育を見た。子どもが冬いちごのことをとてもよく知っていて驚いた。この園では実際に食べたり触ったりできることを目の当たりにし、ムカゴの実や冬いちごを山で探しては食べている子どもたちの笑顔がとても素敵だった。そんなやり取りの中で子どもから「この葉をめくると冬イチゴがあるんだよ」と教えてもらった。自然と関わっていく中で子どもたちが本当に楽しい園生活を送っている姿が見られた。保育者も自然の中で五感を澄まして保育しているので、子どもたちともとても良い関係を作っている。新任の先生は大変そうだ。

A. 感想なので特になし。

Q. 3歳児の山登りは危なくないのか？ ルールやケガへの対応は？

里山保育が素晴らしく、今日は自分も研修ではなく子どもに返った気分で楽しめた。崖をロープ一本で3歳児が登っていたことを本当に危ないなと感じた。色々な過程を踏まずに一から始めてはいないと思うが、約束事とか登り方の指導等があったら教えてほしい。また山登りでケガをした子が今までいたのか？

A. (年少担任) 実は崖をクラスで登ったのは今回初めてだった。入園当初は外に遊びに行くこと自体もとても大変だが、まずはクラスの間を深めて徐々に行ける距離を遠くにしていくようにしている。初めは園舎のすぐ近くでバッタを探しに行く程度だが、徐々にドングリや木の葉を拾いに山の近くまで行くうちに子どもたちが崖に張ったロープを見つける。その中で「登ってみたい」という声が子どもたちから出てきた。今まで何度もドングリや木の葉などは探しに来ていたので「今日は探検をしてみよう」「もっと奥まで行ってみよう」となり、崖をみんなで登ってみた。入園当初は簡単な坂ですら登るのが難しかったのだが、毎日そのような場所で遊んだり、園舎の階段を上り下りしたりしていく中で足腰も強くなったと思ったので今日崖登りをしようと思った。

A. (園長) 人間は大体一万年前に農耕を始め、二百年前くらいに近代工業化した。それ以降、人間は人工物に囲まれた生活を送り始めた。「人工物が安全、フィールド(野生)は危険」という現代人の認識が間違っている。人間は野生として暮らすことが本質的だ。人類の歴史において700万年のうち699年ほどは山(自然)の中で狩猟採取生活を送ってきた。だから子どもの本能というものは「野生」の部分が多いはずだ。

また、ケガのことにしても園内での事故が9:山での事故1の割合、もしくはそれ以下である。よくよく考えれば、人工物は角があり、尖っていて固い物ばかりなのに対し、自然物は丸いし柔らかい。丸く柔らかい物の中に時々尖った物、硬い物がある。葉っぱの上に転んだ時よりコンクリートで転んだ時の方がひどいのは明らかだ。

子どもが動物として、五感を使って育っていくには自然の中の方がマッチしている。そのよ

うな発想の転換が必要だ。ただ、我々大人が町の中で生活をしているので、そちら（町）の方が安全と思っているが、発想の転換をすれば自然の中の方が実は安全。我々も本来は山（自然）の方に馴染みがある。かえってわれわれ大人の方が、子どもたちを通して「自分をもう一回見つけることだ」とレイチェル・カーソンは言っている。子どもたちを通して我々が忘れていたことを思い出すことだと思う。

山登りに関しては蜂にだけは気をつけている。自園の園児は蜂を見つけると石に変身する（蜂に刺されないために）。あと山登りについては、登るときはそれほど危険ではない。下るときの方が危険なので声掛けをするようにしている。その他いろいろあるが、その点は経験の中で保育者も子どもも学習して理解している。ちなみに自園では「廊下を走ってはいけない」、「右側通行」というルールはない。園内もなるべく自然に近づきたい。例えば園舎の壁の一部には柔らかい杉の木を使用している。子どもが廊下を走れるということは「かわせる」ことができるようにしていきたいからである。生き物としては、廊下を走るなどと言われて走らないことよりも、走ってもかわすことができた方が優秀ではないのかという考え方が根底にある。

A.（副園長）「保育者の前に行かない」、「ヘビを見つけたら逃げる」、「下り道は走らない」などの細かいルールはある。またシーズンによって危険が変わる。シーズンで行く場所を変えたり、学年によっても変えたりしている。自然を子どもたちに適した環境として変化させる視点が大事で、ある意味で環境構成と言えるだろう。春はちょうど子どもたちも進級したばかりだが山には食べられる物や花や虫が豊富で、奥に行くことをしなくても楽しい物がたくさんある。夏はわざわざ山で遊ばなくても川で遊びたいと思う。秋には子どもたちも身体が丈夫に動かせるようになるので山の頂上へ行ってみたい、色々なところを探検してみたりすることができる。冬になれば子どもたちもさらに成長し、色々なところを探検しに行ける。また危険な虫や動物もいないので藪の奥まで探検に行くことができる

Q.保育者の自然への知識はどのようにして身に着けるのか？特に新任は？ またクラスの活動はあるのか？

年少と年中に着いて一緒に山登りに行った。保育者が山へ入ったり、自然の中で保育をしたりするということは「これは食べられてこれは食べられない」などの知識が必要なのではないか？ 新任の保育者はそれをどのように身につけるのか。また自園では朝の集まりをしてみんなで歌を歌ったりする時間を設けているが、そのような活動があまり見られなかった。普段の保育はみんなで集まって活動をするようなことはあるのか？

A.今年も新任の保育者がいるが何よりも経験が大事だ。言葉かけ、何をどの様に伝えればいいのかということよりも、まず一緒に経験をしていくことや、保育者も楽しむことが大事だ。子どもたちが発見したことを一緒に共感して「おいしいね」、「楽しいね」と思うことと、先輩の背中を見て学んでいくことが大事だと思う。どのように言葉かけをしているのか。どのようなことに気をつけなくてはいけないかといったことを先輩に指導してもらいながら、自分で真似をしてみながら経験を重ねていくことで知識を身につけている。

自園の保育者が自然に対して特に優れているとは思わない。他の保育の内容と同じで、(自然に対しての知識などは) 諸先輩の背中を見たり教えてもらったりしながら受け継がれていることだ。保育者に対して自然に詳しくさせようと園が思っているわけではなく、子どもの感じることを同じように共感できて、同じ様に「すごいね」と思えて、子どもと同じようにそれを楽しんでいけることが、環境保育として必要な保育者の在り方だと思う。

2 事前アンケート「園での自然環境教育に関する悩み、気になること」

『触ってもいい虫、いけない虫の判断の仕方』

毒のある虫が「いけない虫」ということと判断するが、触ってもいい虫を覚えるのは大変なので、触ってはいけない虫を覚えることを学べばいいと思う。日本での通常環境として死に至るレベルの危険があるのは蜂くらいではないだろうか？ 他にムカデやイラガなどもあるが、個人的意見として本当に危ない虫は本能で人は触ろうとはしないのではないだろうか。一般的に毛虫と呼ばれるものは大体 20%で、さらに毒を持つものはその中で言えば 5%ほどだ。だから 95%の虫は触っても大丈夫だろう。ただ毒蛾の幼虫については被害がとても大きいので覚えておいた方がいいだろう。特にチャドクガという茶の葉に着く虫は被害もひどいので環境として茶の木を育てている場合には気をつけた方がいい。まず死に至ることはないので少しずつ覚えていけばいいのではないだろうか？

『自然の少ない園なのだがどのように自然と触れ合えばいいか？』

実際に園によって自然環境の差はあると思うが、環境保育をしていく上で保育者のあるべき姿というのは、そこにある物、例えば自然が多い園なら自然を使って子どもたちの五感で感じたり発見したりしたことを共感していくことが大切ではないのだろうか。自然があまりない園でも全くないということはない。少しの自然でも豊かに感じられるのであれば、沢山の自然の中で貧しく感じるよりもいい経験ではないだろうか。 風も、雨も、太陽の光も、土も、そこらに生えている雑草も自然だ。実はそれらにも沢山の楽しい要素を持っているので、子どもたちはそれらを感じて育っていくはずだ。大人の固定概念で自然が少ないことをマイナスにとらえていると、子どもたちの発想をキャッチする保育者のアンテナが鈍ってしまう。今いる園の自然というものを、保育者が頭を柔らかくして感じていくことが大事なのではないだろうか。また自然は呼ぶことができるものだ。落ち葉を全て掃いてしまうのではなく、どこかに落ち葉を少し溜めると、虫や生き物が集まってくる。また落ち葉を集める場所によって(日陰、日向) それぞれに集まりやすい虫がいる。自然を集める技術を保育に取り入れれば自然環境というものは作っていけるものだと思う。

町の中でも自然は沢山あるのにただ見逃していることが多い。それは、子どものいる場所は清潔でなくてはいけない、安全でなくてはいけないという大人の概念があるから＝「自然ではない」ということだ。「落ち葉が落ちている園庭は汚い」、「虫が来るような環境は不潔」、「虫が湧く様な場所は嫌なところ」、「砂埃が舞うところは不快」と大人が思うように、現代社会は自然を排除することで人間の生活空間を作ろうという形になってしまった。園でも雑草が生えたら抜いてきれいにしたり、子どもが園庭に穴を掘ったら埋めようと思ったりする

ことが当たり前になっていないだろうか。その点で発想の返還が大事だと思う。自園は夏休みが終わると雑草が生え茂っているためバッタがやってくる。バッタが来ると次は肉食性の昆虫が集まってくる。そしてそれらが来れば鳥がやってくる…というように、「雑草を取らない」からこそその環境ができる。

また自然を持ちこんでくるということもできる。例えば制作の廃材やままごとでも人工物…廃棄物で遊んでいるのではないだろうか。そうではなく落ち葉や雑草を使えばよい。自然物は匂いや手触りも色々で、枯れていくという変化もある。これが紙なら匂いも手触りも同じで、素材が変化することもない。それを土や草を使って遊ぶことで自然と触れ合うということになるのではないだろうか。園にある自然を汚いものにしない、ひょっとしたら子どもにとっては素敵な環境なのかもしれないという発想転換をすること。あと、外にある物をうまく取り入れる発想転換が必要だ。

『子どもたちが自然にさらに興味を持ってくれたらと思い保育をしている。自園にも食べられる実を子どもと一緒に味わったり、遊びに取り入れたりしている。子どもたちが自然の中で遊ぶことで発見や遊びの楽しみをより感じてほしい』

自園にも人が食べられる実をつける木を植えている。木が大きくなったら子どもたちと一緒に食べたり遊びに使ったりしたいのだが、現状として野生の動物たちが先に食べてしまってあまり実現はできていない。実だけではなく、子どもたちが育てた芋なども野生の動物に食べられてしまっているが、自分たち人間が野生の中に入っていると考えればいいのではないか。自分たちが食べられる物は野生の動物たちも食べられるのだと、子どもたちが一体感を味わってくれるのであったらそれもまたいいと思う。

また、食育という点で言えば、幼稚園で食育を行おうと思ったらまず栽培というところから始めるのが一般的だと思うが、個人的には栽培よりも先に採って食べるということが先に来ると思う。栽培したものを食べるよりも、食べられる実などは意外に人間の周りに多く存在しているので、自然にあるものを食べるという経験が先でもいいのではないかと思う。

園の環境によっていろいろだと思うが、食べられる植物は町にも沢山ある。また料理を行うという食育もあるが、環境教育という点から見ると材料の産地や旬の時期やどう育つかを知ることが大事だ。野菜がどこで採れたものなのか、魚が食物連鎖の中でどこの位置にいる魚なのか…などのことが分からないと環境教育と食育ということが結びつかない。採取をする良さは身近な自然の中でも経験できることだ。例えば自園では春に味噌を持って山へ入り、タンポポを採って洗ってから味噌をつけて食べてみる。蝶々も花の蜜を吸いに来る。それは子どもにとって自分は蝶々と同じことをしているという一体化を感じられることとなる。自分自身が自然のサイクルの中に入って感じるということが大事だ。

『自然の中で科学の目や視点を育てるために、どのような環境や保育が必要なのか？』

センス・オブ・ワンダーから一部抜粋。「多くの親（先生）は熱心に繊細な子どもの好奇心に触れるたびに様々な生き物が住む複雑な自然界について、自分がなにも知らない事に気がつく。」 子どもは自然の中でも「先生あれ何？」、「何でこうなるの？」といろいろなこ

とを聞いてくるが、保育者は学校で科学の勉強をするわけでもないし、図鑑を熟読するわけでもないで、子どものそういった質問に答えられないことが多いだろう。だが知ることは感じることの半分も大事ではない。「子どもたちが会う自然体験の一つ一つがやがて知識や知恵を生み出す種子であり、様々な情緒や豊かな感受性は科学に繋がっていく種子を育む土壌なのだ。実は我々も知らないうちにその土壌を耕している。美しい物を美しいと感じる感覚、新しい物や未知な物に触れた時の感激、思いやり、憐みなどの様々な感情が呼び起こされると、その事象に対し次はもっと知りたいと思う。消化する能力がまだ備わっていない子どもたちに事実を鵜呑みにさせる科学的教育をするより、子どもたちが知りたいと思うような道を切り開いてあげるようななどんなに大切なかは分かりません。」とセンス・オブ・ワンダーに書いてあるように、子どもたちを科学に繋げるために自然環境というものはとても大事なものだ。そういった自然環境の中で多くの体験をした子どもは、大きくなっても、目には見えない形で科学の芽というものを自分から開いていくことだろう。

環境や科学の本質的な問いかけは、自然との関係性をどうするのかということである。環境問題とは、人間が自然に対してどこまでインパクトを与えていいのかというバランスであるわけで、相手の自然というものを人間が知っていなくてはいけない。それは理屈や知識で知っていても意味がなく、自然の美しさや楽しさや大切さを自分がきちんと自然とチャンネルを合わせて理解していなくてはいけない。そのことを耕していく上で知ることよりも感じる事が大切なのだ。

科学というと理科、科学といった知識の豊富さや覚えることが大事だと認識しがちだ。知識や学びというものは積み上げていくものなので固くないといけませんが、本来の科学というものは物事を感じる視点が必要なので柔らかさが必要だ。現時点で分かっている科学的な知識などということは些細なことしか分かっておらず、それを幼児期に覚えたり積み上げたりする必要は個人的に必要ではないと感じる。真に科学的な視点というものは「不思議だ」と思う感覚からしか始まらない。

鯨の先祖は牛だ。一角は犬歯が進化して角になっている。キツツキの下は後頭部を一周して鼻を通して一周している。柔らかい発想をしない人間でなければ月にロケットを飛ばそうと思わないように、そこまでの発想を思いつく柔らかさの原点は「不思議だな」と思うことではないのだろうか。

『自然に生えている草を使って子どもたちに遊びを伝えたいのだが、普段は子どもたちに生えている草は取らないようにと伝えている。その線引きをどうするとよいか？(自然に生えている草木を使った遊びを子どもたちに教えてあげたいのだが、普段は草木にも生きていと伝えているから子どもたちには草や花は採ってはいけないと伝えている。どのように分けたいのだろうか？)』

草木を採ってはいけないというような伝え方はしない。子どもが興味を持っている物に対しては「採ってはいけない」という声掛けよりも、草木を取って何か気づいた子どもの様子に目を向けてあげることが優先しているが、園外で誰かが手入れをしている花や各家庭の庭先などで育てている花等を子どもが取ろうとしたときには声をかけていけないと伝えている

る。

採っていいものといけない物の違いは何なのか？ 人間と自然との関係を考えて時に「命って何だろう？」ということから始まると思うが、人間も色々な生物の命をもらって生きている。自園でも飼っているカエルに子どもが捕まえてきたバッタを持ってきていた。そういったことも含めて子どもが大事に育てている物と命の関係性が問題になっていくのだろう。そこにある命と自分はこういった関係があるのか、自分がその命ある物にどう接するのかということになるだろう。ある時年少児が、年中が昨年から育ててきたチューリップを抜いて花束にして保育者に渡したことがある。だが、その子は「先生のためにきれいな花を集めてきたよ。」という思いで持ってきたものだからその思いを大事にしようと思う。だが、その子が自分で育てたならチューリップを保育者にプレゼントすることはないと思う。採っていい物いけない物というのは各園の保育指針によって異なり、またなぜそういった結論になったのかということはその園で培われてきた文化として築いてきたものであり正解だの間違いだのと言ったことでない。人間はいろいろな生物の命を奪って食物にすることで成り立っているのだが、そこをどう子どもたちに伝えていっているかをどこで線引きするか…子どもと自然との関係性を考えるのならば、文化として各園の方針を引き継いでいくだけでなく、どこに線引きをするかくらいのことは改めて話し合うことも大事だろう。子どもが自分で「これは採ってはいけない草花なのだ。」と思うようになる経験とはどういったことだろうと保育者が改めて考えていくことも必要ではないのだろうか。

第3回	1月26日(土) 9:30~12:00	井上幼稚園 (豊田市)	「公開保育とそれに基づく研究協議会 ②」 ファシリテーター 環境教育特別委員会委員
-----	------------------------	----------------	---

1 公開保育 (園外：年長、年中、年少各3クラス、園内：年長2、年中2、年少3)

年長：里山遊び、ドッチボール、氷鬼、サッカー、竹馬、なわとび、氷遊び等

年中：里山遊び、ころがしドッチ、うずまきじゃんけん、鬼ごっこ、大なわとび等

年少：里山遊び、乗り物遊び、砂遊び、鬼ごっこ、ままごと、ごっこ遊び等

2 質疑応答

Q: 宝箱はなぜ、学年ごとに形が違うのか？

A: 意味は特にない。その年によって考えて造る。

Q: 巣箱がたくさんあるが、巣はかかっているか？

A: 6割くらいかかっている。

Q: 里山へはどれくらいの頻度で遊びに行っているか？

A: 季節ごとに出掛けたいと思っている。年少は今日が初めてだった。

Q: 危ないものが子どもの手の届くところにあるが、どう考えているか？また、保護者からの指摘や怪我はないのか？

A: 危険・安全なことを言い出したらキリがないが、生活する道具を子どもが触れられる

のもいいのではないか。

保護者からの指摘は今のところない。怪我もなく、子どもが危険なもの（枝など）を振り回すようなこともない。

Q: 考えがゆるいかもしいれないと言う園長先生の思いを受けて、各先生はどう思うか？

A: 戦っているところはある。年齢的に守りに入っているところもあるが、実際に遊んでみて、気付いたことも多く、だんだん染まってきている。親からのクレームもなく、園の環境を見て、入園させたいと思う親も多い。環境作りも、親と相談しながら進めてきているため、私たちもそういうものなのかなと思っている。

子ども達と遊ぶことで、この環境に慣れてきていて、子ども達と一緒に、危険なことも学んでいる。

Q: 園庭のコンセプトは？

A: 幼少の頃、里山でよく遊んだ経験から、築山中心の園庭に、と考えていた。最近の環境で、なかなかないため、子ども達にとって、自分の原体験・原風景と近い場所になればいいかなという思いで造った。

家に関しては、特に計画性はない。楽しみながらその都度造っている。

Q: 園舎が変わって、子どもは変わったか？

A: まず、表情が変わった。玩具で遊ぶだけじゃなく、自分たちで遊びを作り出したり、発見したり、先生が導き出すのではなく、子どもが自ら気付いて感動する姿が増えたように思う。

2 協議会

- ・井上幼稚園を見て感じたこと、学んだこと、取り入れたいと思ったこと。
- ・里山の遊びを見て（同上）
- ・冬の自然をどのように保育・遊びに取り入れるのか。

※各グループでポストイットに書き込み、自由にB紙に貼っていく。

3 グループ発表

各グループ、1人ずつ感想などを発表していく。

4 感想

- ・園に入った時に、ワクワクする環境だと感じた。通っている子どもも、貴重な体験をしていると思った。寒いから嫌じゃなく、心が自然に向かっている環境がいい。
- ・木の温もりを感じて、素敵だなと思った。大人でも遊んでみたいと思った。子どもが遊びを見つけやすい環境。
- ・子どもがワクワクする環境があるなかで、好きな遊びを通して、先生と子どもが楽しみを共有していた。
- ・子どもが何を見つけてくれるか期待できるような環境作りだと思った。
- ・園庭がおもしろく、自分も遊びたくなり楽しかった。保育室にも廃材があつたりして、勉強させてもらった。

5 まとめ

今日の研修会で、A 研修会全3回の研修が綺麗にまとまったように感じている。ここでは環境教育とは何かというような難しい話はしないことにしたい。なぜなら基本的には環境教育といっても、それは保育のあり方の1つだと思うからだ。子どもが育っていくための保育は、どういうふうにあるものなのかということ、環境教育という視点でみている研修会だと思えばいいと思う。

今日皆さんに書いていただいたポストイットの内容をまとめるとすれば、そこには保育・環境教育・自然体験教育のテキストができるくらいの内容があると思う。

まず今日井上幼稚園を訪れて、まず、皆さんが共通に感じたことはなにかと言うと、この幼稚園の子どもは楽しいだろうなということだと思ったのではないだろうか。いろいろな保育目標・方針を持つ、多様な幼稚園が存在するのだが、しかしその中で絶対に共通するべきことがあるとしたら、それはその園がどんな園であろうが、そこは子どもにとって楽しいところでなくてはならないということである。それぞれの園のおかれている状況はそれぞれあっていいが、幼稚園という場が、子どもにとって、楽しい場でなければならない、ということが基本であり、今日はそれを感じることができた。

今日の受講者の皆さんは、いつの間にか保育者の視点ではなく、子どもの視点で井上幼稚園の環境と保育を楽しめたのではないだろうかと私には思えた。

私は、子どもは「育てる」ものではないと思っている。「育てる」と言うのは、子どもに対して失礼だと思う。それはどういう意味かと言うと、「育てる」という言葉からは、私たち大人・教師は何でも知っている存在であり、対する子どもは未熟ゆえに大上段に教えていくのだという構えのようなものを感じるからである。子どもは、すでに一人の人間であり、自らの力で生きている存在である。だから、わたしたち保育者は子どもを「育てる」存在としてとらえるのではなく、自ら「育つ」存在であるととらえたい。

その認識の上に、私たちができることは、子どもが「育つ」ようにすることである。それが環境による教育ということであり、遊びによる教育ということなのである。

人間が育っていくということは、情報を増やしていくということである。私たちは生まれた時から、遺伝子情報をもっている。そしてその遺伝子情報を子どもたちにきちんと使えるように保障していく必要がある。それは十分な時間と場と動機を用意し、そのことによって子どもたちが心と体を使って直接的な体験を出来るようにするということである。その体験ということはさらに具体的に言えば、五感を使って環境への働きかけを積み重ねていくということである。

この流れの中で遺伝子による情報は持っているだけでなく、使われることで次の段階の実体験による情報へと変わる。そしてさらにその先に、知識とか、学習というような間接的な情報を豊かに得ることへと繋がっていくのであろう。

しかし、現代の教育は効率性に偏るあまり、いつの間にか間接的な情報取得に偏り、ゆったりと試行錯誤しながら豊かに体験を積み上げていくことが少なくなってきた

る。特に幼児教育にあってはとても必要なことだと考える。

このことを環境教育に当てはめるとしたら、それは子どもが五感を最も使いやすいのが自然なのである。従って、子どもが育つためには自然体験は最も適切なものなのではないかと考えられる。

皆さんが、クラスや子ども達の前に帰った時に、子どもを「育てる」という思いばかりではなく、子どもは「育つ」という意識を頭のどこかで意識して、豊かに五感を使うような自然体験を実践していただけたら嬉しく思う。